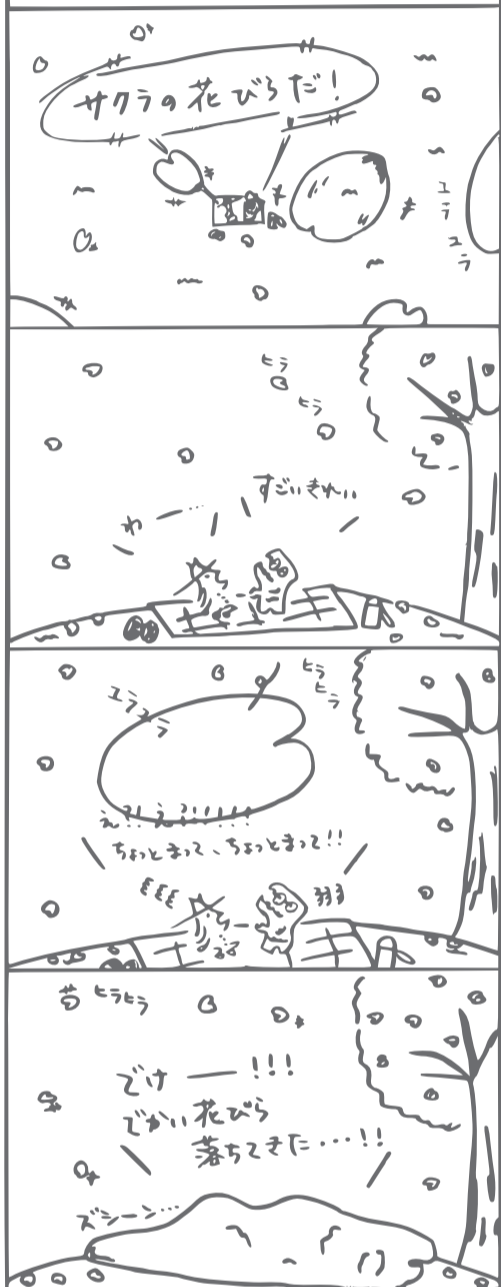


逆説的私漫画

さく:いげぢん え:まゆげ 飛 Vol.9



パラドックス 「ずっと気にはなっていたのだけれど……」

パラドックスの代表 鈴木猛之氏が「鈴木猛志」に改名。



4月1日に入社する新入社員たちが社長の新氏名を清書。

株式会社パラドックス(東京・港区)の代表取締役の鈴木猛之氏(48)が本名を「鈴木猛志」に改名することが弊紙記者の取材により明らかになりました。鈴木氏は取材に対し、「名は体を表す。『志の実現に貢献する』という会社の理念に対して、気持ちも新たにこれまで以上に邁進していきたい」と話しています。

同社はブランディング事業を中心とする会社として2017年には設立16年目を迎えますが、創業から変わらぬ企業の根幹となるキーワードは「志」。『志あふれる

日本をつくる』という企業のビジョン実現のために、これまで多くの人や企業の志をブランド化。そんな中、鈴木代表が自身の名前にも「志」を入れるという決断をしたことで同社内では話題になっているといいます。

「今後は氏名に『志』が入っている人を積極的に採用していきたいし、『し』の付く人は『志』に改名することを推奨していきたい。『氏名』に『志』がある、それが私たちの『使命』です！」(鈴木代表)。

今後のパラドックスの人材戦略から目が離せません。

ニュース シン・広報チーム!

4月1日付で社内の組織体制の人事異動があり、広報チームも若干のメンバー変更がありました。ひとり減ってひとり増えます。今後ともよろしくお祈りします。(し)

自分は何のためにコピーを書いているんだろう? 何も教えてくれない先輩を呪い、センスのないCDを呪い、何より、1ミリの才能もないくせにこんな難しい職業を選んだ自分を呪った。呪詛のような日々から救いを求め写経していたのが、優秀なコピーがたくさん掲載されている東京コピーライターズクラブ年鑑(TCC)。そこで不思議な名前のプロダクションを見つけたのです。(パラドックス)大量消費される制作物と違い、派手さはないが血が通っていて、心が動かされるクリエイティブと感じた。へー! こんなピュアなものをつくってる会社もあるんだ。気づけば二十六歳になっていた私。暗すぎるトンネルで、懐中電灯すら持っていない。一縷の光を求めて、転職用の作品をまとめ始めました。

私が必死に取り組んでいたのは、通称「当て駒」と呼ばれる仕事でした。私のCM案は、内容はどうでもよく、競合コンペの体裁のために必要なだけ。代理店の営業力でコンペに勝った後、本番のCMは代理店のクリエイティブチームがガッツリ予算をかけて制作する。そんな流れの仕事でした。「当て駒」だったなんて、知らなかった。上司も教えてはくれなかった。ああ! そうなんだ。ここを華麗にスルーして「次こそは僕らのCM案が採用されるかも」と仕事に励むのが、小さいプロダクションの実力のない人間のお作法なんだ。大学を卒業して幸運にも手にしたコピーライターという肩書きが、急に痛々しく、虚しいものを感じました。

「もうこんな仕事いやだあああああ!!!」深夜タキシードの窓から叫んでいた、二十四歳の私。新卒二年目の夏。広告プロダクションで働く私が必死に取り組んでいたのは、大手代理店からのCMの競合コンペ。営業さんから依頼を受け、徹夜で考えた案をご提出。「最高! この案で通してきます!」という営業さんを見送り、ドキドキしながら結果を待ちました。

中堅社員が綴る暗黒時代。
そして、光が見えた瞬間。



第9回

田村ダン
(前編)